吸血鬼と使い魔にされた俺

もっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼と使い魔にされた俺

【Ｎコード】
Ｎ９８２５Ｗ

【作者名】
もっち

【あらすじ】
主人公と吸血鬼のヒロインの物語です。主人公、大沢彰人は親同士の婚約を断って魔界から逃げてきた吸血鬼のエーリに使い魔にされて、魔界の婚約者からの追っ手と戦う羽目に。「おとなしくもう一回させなさいよ！」ｂｙヒロイン。「ちょっ！　連続で二回目はきついって！」ｂｙ主人公。
素人ですがよろしくおねがいします。

出会いでいきなり

「あれって……人……だよな？」

俺はごく普通の高校生、大沢彰人（おおさわあきと）。現在、幼馴染の大河内亜子（おおこうちあこ）と私立一ノ本学園（いちのもとがくえん）で別れたあとの帰り道。その途中に一人の少女が仰（あ）向（むけ）けで倒れているのを発見。しかも、なにやら黒いマントをつけていていかにも怪しい。

「こ、声をかけるべきなのか……？」

「なるべく危ないことには関わらない」が俺のモットーだが、人としては助けるべきなんだろう。ここは人がなかなか通らない道だし、このまま死なれるというのも気分が悪い。

少し、少しだけ話しかけてみてアウトかセーフを見極めるんだ。そうすれば問題はないはず。ていうか、顔はすごい端正だし、寝顔はとても可愛らしい。スタイルは残念だけど……。とにかく、誰もが見惚れるぐらいの美少女なはずだ。

なら、ここでお近づきになっていれば後々、「感謝の気持ちでメイド服着てきました」とか「一生あなたのそばにいます。大好きです！」等々、美味しい展開があるんじゃないか？

俺も青春真っ盛りの男子だ。そんなチャンスを見逃すわけない！

俺は意を決して名も知らない少女に近づいた。

「あの～、大丈夫ですか？」

そう言った瞬間だった。女の子がガバッと起き上がり

「（カプッ）」

と、俺の首筋に噛み付いてきたのであった。

出会いでいきなり（後書き）

ありがとう御座いました。次回もよろしくお願いします。ちなみに他にも「剣と書いて初恋と呼ぼう」（魔法もの）と「ゴーストハンター　～いわば神様のパシリ～」も連載しています。よろしければ読んでください。

ごちそうさまでした

何がなにやらわからない。俺は普通に倒れている美少女を助けようとしたんじゃなかったっけ。

「（ゴクゴク）」

彼女の喉（のど）から飲み物を飲むときの音が聞こえる。

そして、彼女は缶ジュースなどの飲み物を手にしていない。俺の首に口を当てている。

ということは――

「ゴクッ……フゥ。ごちそうさまでした」

――彼女は吸血鬼――

その考えに行き着いたときには意識を失っていた。

「……んあ？」

ここは……俺の部屋？　目を覚ました俺は周りを見回す。

じゃあさっきのは……夢？

「よかったぁ」

つい安堵の息が漏れる。

それもそうだよな。よくよく考えたらこの世に吸血鬼なんているわけないもんな。

「（グ～）」

安心したからか俺の腹から大きな音が鳴った。そういえば、夜ごはんをまだ食べていなかった。

「作るのも面倒くさいし、外食で済ませるか」

俺はベットから立ち上がり――ちょっと待て。今、ベットの上にどこかで見たことのある黒マントがあったぞ。あの吸血少女との出会いは俺の記憶が正しければ夢の中の出来事のはずだが……。まさか、な。

有り得ないと思いながら毛布をバッとめくり上げると、そこには

――

「えええええええええ！！」

――先程の吸血少女がすやすやと寝ていた。

ごちそうさまでした（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。感想も待っています。

吸血少女のエーリ（前書き）

ありがとうございます。おかげさまで、たった二日で１００アクセス突破しました。これからも皆さんが楽しめるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

吸血少女のエーリ

「ん……なに？　うるさいわね」
俺の声で目が覚めたらしい吸血少女が体を起こす。
「お、お前！　なんでここにいる！」
俺は動揺しまくりだった。当たり前の反応だろう。夢の中の出来事の吸血少女が目の前にいるんだぞ。誰だってこうなるに決まっている。
「なんでって……なんでだろう？　教えて？」
「こっちは聞きてえよ！」
「うるさいわね。静かにしなさいよ」
「理不尽だ！？」
こいつは家に入れてもらっている身のくせになぜこんな偉そうにしているんだ。ていうか、俺の家族がいたらどうするつもりだったんだ、こいつは。幸いにも、両親は世界一周の旅にでていたから助かったけど。……俺が。
うちの母親はアホなのできっと俺の話も聞かずに「こんなかわいい子を騙して！」とか言って俺を殴り倒すに決まっている。想像するだけで恐ろしい。それだけは勘弁だ。
「大体、お前は誰なんだよ？　俺はお前なんか見たこともねえぞ！」
多分だが。
「私？　私はエーリ・ミナルバ・ルーク。特別にエーリって呼んでいいわよ、使い魔（げぼく）」
「……は？」
つい口から漏れてしまった。待て。今、下僕って聞こえたんだが……まさか――
「――俺のこと？」
「そうよ」
吸血少女はあっさりと認めた。

「じゃあ、私の情報を教えたことと引換(ひきかえ)えに――いただきます」
吸血少女はカプリと待ち遠しかったかのように俺の首筋に噛み付いた。
「え？　ちょっと待て、お前ぇぇぇ……」
俺は本日二度目の眠りについた――

吸血少女のエーリ（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。また、アドバイスなど工夫点がありましたら是非教えてください。待ってます。

嫌な奴（前書き）

ありがとうございます。おかげさまで２００アクセス突破しました。これからも皆さんが楽しめるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

嫌な奴

――って、たまるか！

俺は意識が遠のく前にエーリの体を突き放した。

「きゃっ！」

しかし、血を吸われたので力が出なかったのかエーリは思ったほど飛ばなかった。

「ちょっとなにするのよ！　痛いじゃない！」

「それはこっちのセリフだっつーの！」

「使い魔のくせに主人に反抗する気なの！」

「下僕？　そんなこと知るかよ！」

お互いに声を荒らげて思ったことを率直にぶつけ合う。

「そこに座りなさい、使い魔！」

「嫌だね！　大体、下僕、下僕って俺には大沢彰人って名前があるんだよ！」

「じゃあ、彰人！　そこに座りなさい！」

いきなり呼び捨てかよ。つくづく気に入らねえな、こいつは。

「だからイヤって言ってるだろうが！」

「ああ！　もう！　いくら死にかけだったとはいえ、なんでこんな奴を使い魔にしたのかしら！」

「はっ！　運がついてなかったんじゃねえの」

「まったくよ！　目覚めたら知らない世界にいるし！　訳わかんない男に追われるし！」

……ん？　目覚めたら知らない世界？　何言ってんだ、こいつ。

いや、まあ、俺の血を吸っている時点で人間ではないと思っていたけど。

でも、そんなことより今は気になる点がふたつ。

一つ目は血が上っていたので気付かなかったが俺の部屋の窓が割れていたこと。もう一つは――

「なあ、お前を追っている男って、もしかして……」
「ええ、あんたの隣にいるその男よ……えええぇぇぇ！」
エーリの言う男が俺の隣に立っていたことだ。

嫌な奴（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。感想も待っています。

追っての男（前書き）

ありがとうございます。おかげさまで４００アクセス突破しました！　これも読んでくださっている皆様のおかげです。これからもよろしくお願いします。

追っての男

落ち着け、俺。今の状況を簡単に整理するんだ。
まず、エーリはある男に追われてこの世界に来た。これは多分本当っぽい。あいつ自身も吸血鬼だし。なら、エーリを追っているこの男も吸血鬼の可能性が高い。
男は大木のように大きく身長は軽く2メートルはあるに違いない。腕も女性の腰ぐらいの太さ。そんな巨漢のすぐ横にいる俺。
……かなり危険じゃねえか！
急いで逃げようとすると男が手で俺の体を掴む。
「おい！　俺は関係ないだろ！　離しやがれ！」
俺が男の手の中でジタバタと暴れると、男が口を開けた。
「落ち着いてください。私はあなたに危惧を加えるわけではありません」
「え？　そうなの？」
この巨漢は言葉遣(ことばづか)いも礼儀正しく、とても体に合わない性格をしていた。
「ええ。あなたがあそこの少女を私に渡してくれたら……ですがね」
「ああ、そんなことですか」
「ちょっと待ちなさいよ、使い魔(げぼく)！　あんた、主人をそこの男に売る気！？」
「当たり前だろ。今までの自分の行動を思い出してみろ」
おれがそう言うと、腕を組んで考え込むエーリ。
俺の血をいきなり吸ったり、勝手に人の家に上がり込んだり、俺のことを下僕扱いしたり、と俺が得した点は一度もない。助ける訳がない。それぐらいあいつでもわかるはずだ。
「あんたに迷惑かけたことなんて一回もないわ！　むしろ、得をさせたくらいよ！」
「嘘付け！」

どうやったらその答えに導かれるんだよ！　無理だろ！　どんだけ頑張っても無理だろ、今の返答は！

「あの～、そろそろいいですかな？」

俺たちの会話を待っていてくれた男が尋ねてくる。紳士だな。

「ええ、持って帰ってください」

「では、遠慮なく」

「ちょっと――！！」

エーリは俺を視線で殺せるぐらいの目で睨んでいた。

追っての男（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。また、アドバイスなど工夫点がありましたら是非教えてください。あと、もうそろそろバトルに入っていきます。今まで読んでくださった方々もはじめての方々も楽しめるように頑張りますので待っていてください。

男の豹変

「さあ、来てもらいますよ」
「やめなさいよ！」
男がエーリを連れていこうとするが、抵抗するエーリ。
「なら、こちらにも手段というものがあります」
男が拉致（らち）があかないと思ったのか、強行手段に出る。
「ちょっと！　そんな汚い手で触らないでよ！」
「なるべく傷を付けるなと言われていたが……仕方がない」
男がエーリの細い手を掴んだと思うと、ゴキッと鈍い音がした。
なんと、エーリの手を男がへし折ったのだ。
「いたっ！！　うぅ……」
エーリの苦しんでる様子が嫌でもわかる。いくらあいつが言うこと聞かないからってこんなことまでしていいのかよ。
「あなた様は吸血鬼です。これぐらい時間が経てば自然と治るでしょう。さあ、行きますよ」
男がグイッとエーリを抱きかかえる。
「……いやって言ってるでしょ！　その汚い手で触らないで！」
バシン！　とエーリが平手で男の頬を叩いた音が響く。その瞬間、男の目付きが変わった。
「……てめえ、下出に出ていたら調子に乗りやがって……！　もう頭に来た！　もっといたぶってから連れていってやる！」
「キャッ！？」
先程までの温厚な性格が嘘のように、男が怒りだし、エーリを壁に叩きつけたあと、男が手に光を集めてヤリの形にしたものを作り出す。そして、衝撃で動けなくなったエーリの体めがけて鋭利な形をしたその槍をを突き刺そうと振りかぶった。
「喰らいやがれ！　制裁（ジャッジメント・スピア）の槍！」
俺は動揺しまくりだったが、いくらなんでもそれはやりすぎだろ

うと思い、エーリを助けようと飛び込む。
（あれ？　なんで俺、こいつを助けようとしてんだ？）
そう考えたのは男の槍からエーリをギリギリ守った時だった。自分でも不思議に思ったがそれも一瞬。エーリを助けたことにより俺も男の標的に入ってしまったのだ。
「貴様も私の邪魔をするのか……。なら、殺す！」
はあ……。全く勘弁してもらいたいものだ。
俺はため息をつきながら、ここ数年握ってなかった竹刀を手に取った。
「少しだけなら……相手してやるよ」

男の豹変（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。また、アドバイスなど工夫点がありましたら是非教えてください。感想も待っています。

チェックメイト（前書き）

ありがとうございます。お陰様で８００アクセス突破しました。これからも「吸血鬼と使い魔にされた俺」を応援よろしくお願いします。

チェックメイト

「ふん、貴様如きが私の相手だと……？　笑わせるな！」
「やってみなきゃわからねえだろ？」
俺がわざと挑発するように言う。
「いいだろう！　私に楯突いたこと、後悔させてやる！」
男は見事に先制攻撃を仕掛けてきた。
先ほどと同じ方法で今度は剣を手に持ち、俺の頭めがけて振り下ろしてくる。
俺はそれを一歩横にずれ、ギリギリで躱(かわ)す。俺が元いた場所は、下まで穴が貫通していた。
「ふははは！　どうだ、この威力！　おじけづいたか！」
自慢げに高らかに笑う男。
「自慢はいいからさっさと来いよ、おっさん」
「その強気な態度もいつまでもつかな！」
もう一度同じ動作を繰り返す男。
確かにパワーはすごかった。人間が太刀打ちできる相手じゃない。
だが――
「なっ！？」
「――スピードはトロイぜ、おっさん」
俺はおっさんの斬撃を利用して、振り切る前に懐(ふところ)に入り喉元に竹刀の先を突きつけていた。こうしておけば、あとは勝手に男の方から振り切ったと同時にクビに竹刀が突き刺さる。
おっさんの攻撃は全体重をかけた力任せだからな。
「がはっ！！」
予想通り喉(のど)にクリーンヒットしたらしく、男が床に倒れ込む。
そして、俺は喉を抑えて苦しんでいるおっさんに近づき首の横に竹刀を薙ぎ払い、ピタッと止める。
「チェックメイトだぜ、おっさん」

チェックメイト（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。また、アドバイスなど工夫点がありましたら是非教えてください。

人生初体験――空を飛ぶ（前書き）

１０００アクセス突破！　これも皆様のおかげです。これからも「吸血鬼と使い魔にされた俺」をよろしくおねがいします。

人生初体験――空を飛ぶ

「くぅ……。私の負けだ……」
男が音を上げる。どうやらあきらめたようだ。
「ふぅ……」
安心した俺は男の首から竹刀を引く。だが、これが命取りになった。
「甘いわ、小僧！」
「がっ！？」
男が待ってましたというように首を絞めてくる。
や、やべえ……。このおっさん、本気で殺しにかかってきやがった。
「さあ、死ねえ！」
さらに力を加えてくる。
これじゃあ、真剣に意識が……。竹刀で男の体を叩くが気にも留めていない。
「うぅ……！」
必死にもがくがマウントを取られては、身動きができない。竹刀を握っていた手の感覚もなくなってきた。
ばあちゃん。俺もそろそろそっちに行くよ。そう思った時だった。
「あんた！　私の使い魔（げぼく）を離しなさい！」
「エーリ……」
声のする方を見ると背中に漆黒の翼が生えたエーリがいた。
何も考えないままにこっちに突き進んでくる。
「あ？」
俺を殺すことに必死だった男は冷静さを失っていたらしく、エーリに気づいたときは壁に吹き飛ばされたあとだった。
「サンキュ。助かっ――」
「逃げるわよ！」

「――は？」
エーリは男を吹き飛ばした勢いのまま俺の手を掴み――
「うわぁぁぁ！？」
――月に照らされた闇に舞った。

人生初体験――空を飛ぶ（後書き）

毎度ありがとうございます、次回もよろしくお願いします。また、アドバイスなど工夫点がありましたら是非教えてください。

空から地上へリターン（前書き）

久しぶりの投稿です。これからまた連載再開と思いますのでよろしくお願いします。

空から地上へリターン

「落ちる〜〜！！」
「ちょっとおとなしくしてよ！　本当に落とすわよ！」
そんなこと言われても！　おまえは吸血鬼かもしれないが、俺は人間。なにも安全装置を付けないで空を飛ぶなんてことをされたら誰だって俺と同じ反応をするに決まっている。
「ちっ。王に逆らう異端者共がぁ！」
「追っかけてきやがった！」
鬼のような形相で。
「しっかり掴まりなさい！　少しスピード出すわよ！」
「マジかよぉぉぉ！」
死ぬ！　死んでしまう！　……そうだ。こんなときは心身を落ち着かせるんだ。かんじーざいぼうさーぎょうじんはんにゃはらみた——って仏教唱えている場合じゃねえ！
そんな俺の気持ちも無視してエーリは左右に飛び回る。しかし、なかなか大男を振り切れずに数分飛び回り続けていた。
「いい加減に逃げるのをやめたらどうだ！」
うるせえな、近所迷惑になるだろうが。ていうか、今、大男を見てわかったが、さっきからエーリのスピードが落ちている気がする。……気のせいか？
「どうかしたのか、エーリ？」
「つ……つかれた……」
「え！？　もう！？」
「しょうがないでしょ！　ずっと城の中にある自分の部屋で暮らしていたんだから！」
「典型的なニートじゃねえか！」
「も、もうダメ……」
「うおおおい！」

エーリはついに体力が切れて、地上に向かって落下していく。そして、ついにゴミ山に落ちてしまった。

空から地上へリターン（後書き）

読んでいただきありがとうございました。これからも宜しくお願いします。

普通にピンチ

「いてて……」
俺は何とか体を起こす。
落下した場所がごみ山で助かった。コンクリの壁とか屋根の上だったら確実に死んでいただろうからな。神様に感謝だぜ、本当。
「おい、エーリ？」
「う、うん。……なんとか……っ！」
エーリが顔を苦痛にゆがめる。
手で足を押さえていたので見てみると、赤くはれ上がっていた。どうやら、今の墜落で足を痛めたらしい。
「立てるか？」
「ふ、ふん。使い魔（げぼく）の手なんか借りなくてもこれぐら、いたっ！」
相当痛むのか、へたへたと崩れ落ちるエーリ。歩くことさえままならない状況で、いやな笑みを浮かべながら大男も地に降り立つ。
「くくく、足を怪我したか。これで逃げることはできまい」
そう言って手に作った制裁の槍（ジャッジメント・スピア）を放り投げてくる。
「きゃあ！」
「あぶねえ！」
俺は動けないエーリを抱きかかえ、全力で突っ走る。
「クハハハ！　いつまで持つかな？」
あの様子からして大男は疲れてないし、むしろ生き生きしている。それに対して、こっちは一般人と負傷したニート吸血鬼。しかも、武器もないので無手だ。
……あれ？
何気に絶体絶命のピンチじゃね、これ？

普通にピンチ（後書き）

読んでいただき有り難うございます。次回も宜しくお願いします。

大男を倒す方法（前書き）

おかげさまで自身の作品で初めて２０００アクセス突破です。ありがとうございます。これからも末長くよろしくお願いします。

大男を倒す方法

大男の追跡から逃げ続けて１０分ほど経った。商店街まで逃げた俺とエーリは現在、とある店の中に隠れていた。

「さあ、ど～こか、な！」

大男が一つずつ制裁の槍で店を壊していく。まだ俺達の居場所はわかってないようだ。

エーリを抱きかかえながら走っていた俺は逆転の糸口も掴めず、体力に限界が来ていた。町でこんなことをしていたら警察とか来るだろうと思っていたが、人はみんな、動かずに固まっていた。エーリ曰く大男によってこの人たちの時間は止められているんだとか。

まあ、今はそんな理屈はどうでもいい。なんとかあいつを倒さないと。

「なあ、エーリ。なんとかあいつを倒す方法はないのか？」

「あるにはあるけど……」

「あるのかよ！　早く教えろ！」

「駄目なの、この方法は！」

「なんで！？」

「あなたの人生に関わるからよ……」

「！」

こいつ……。自分の人生が終わるかもしれないって言うのに俺のこと心配してたのかよ。さっきも助けてくれたし、俺のことを下僕とか言ってる割には優しいんだよな……。

エーリは自分の人生をかけているんだ。なら、俺も人生の一つや二つかけてやらないとな！

「……それでもいい。教えてくれ」

「ええ！？　いいの、あなたはそれでも！？」

「ああ。だから、はやく！」

「わ、わかったわよ……」

エーリは少し頬を赤くしてからこう言った。
「キ、キス……よ」
「……は？」
まさかの発言だった――。

大男を倒す方法（後書き）

読んでくださってありがとうございました。次回も宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9825w/

吸血鬼と使い魔にされた俺

2011年11月26日22時05分発行